

横瀬地域づくり協議会

地域の現状と課題

横瀬浦は1562年に南蛮船来航の地として開港され、キリスト教徒や商人たちが集まり、繁栄していたと伝えられています。また、寄船地区には、唐船の密貿易を監視していた船番所跡があり、かつて南蛮貿易の際に目印とされた白い十字架が建つ「ハノ子島」が港の入り口にぽっかりと浮かぶ、ロマンと歴史にあふれた安らぎのある風景を有する地域です。

横瀬地域では、10年後も暮らしやすいまちであり続けるため、令和4年に「横瀬地域づくり協議会設立準備会」を立ち上げ、話し合いを重ねる中で、課題だけでなく、様々な特色ある歴史や文化、豊かな自然を改めて認識することができ、人々のつながりを誇りに思うことができました。

そのような地域の皆さんの想いを一つにし、次世代に明るく、元気で美しいふるさと横瀬を引き継いでいくためには、人口減少や少子・高齢化などの課題もある中、いかに地域がつながり、自治機能を維持していくかが重要であり、今後も安心して住み続けられる町にするため、約40名が中心となって令和5年5月に「横瀬地域づくり協議会」を立ち上げました。

現在の主な活動内容

○子どもたちの部会

- ・子供向けの英会話教室、書道教室（1回／月）
- ・大人向けの英会話教室、筆ペン教室（1回／月）
- ・ふるさとを知るウォークラリー
- ・西海市・米軍基地親善 子ども交流釣り大会

○景観・環境部会

- ・マップ、案内板作成
- ・花を植える、除草作業などの景観整備
- ・クリスマス・イルミネーション飾り

○産業振興部会

- ・「メルカード^(※)横瀬浦」の実施
- (※)メルカード:ポルトガル語で「市場」の意味

人口 1,206人

世帯数 509世帯

設立 令和5年5月1日

(令和6年12月31日現在)

<拡大図>

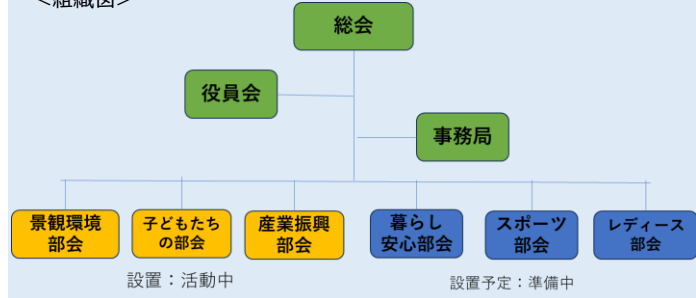


話し合いの様子



ハノ子島

<組織図>



クリスマス・イルミネーション

メルカード横瀬浦2024
西海北小1年によるオープニングダンス

どのように地域づくりを進めていくべきかを考えるにあたり、まず住民に対してアンケートを行ったところ、住民が感じているふるさとの素晴らしいところ、困っていること、心配なこと等を把握することができました。また、その後、8回にわたるワークショップで話し合いを重ね、住民とメンバーの想いが詰まった10年計画である「横瀬地域づくり計画書」を作成しました。

少子高齢化、過疎化が進む中、今、自分たちが動き出さないと土台が弱くなっていくと感じていたところ、老人会長が「このままでよいか」と声をあげたこともきっかけとなり、住民を集めてシンポジウムを開催し、アドバイザーの方にも講演をしていただきました。そこで住民が、なんとかしたいといけないという共通意識を持ちました。また、同時期に市から「地域運営組織事業モデル地区」に指定されたことも後押しとなりました。



横瀬地域づくり協議会
会長
永野 道廣さん

他県へ先進地視察に行った際には、当該団体が修学旅行生等に提供している竹を切ってご飯を炊く体験や、ミカンを摘果してそれを使ってポン酢づくりをする体験をしました。工夫次第で地元にある材料を使った観光資源はいくらでも作れると知り、これから事業を考える際の参考になりました。

土地柄、佐世保市と近く、米軍に勤務するアメリカ人も多くいるため、米軍との交流を大切にしてきました。英語教育、友好、平和の意識が子供たちに根付いてほしいと期待しています。

子供たちにふるさとを好きになってもらって、一度地元を出ることになっても、いずれ戻ってきてもらいたいです。そのために子供の頃から横瀬に愛着を持つような取り組みを続けていきたいです。

行政からの支援



西海総合支所長

西海市は概ね旧小学校区域において地域運営組織を設立した団体に「西海市地域づくりモデル事業交付金」を交付しています。

また、総合支所職員が毎週1回、地域マネージャーと地域運営組織の地域づくり計画に基づいた事業の進捗状況確認、イベント等の計画立案助言及び後年度事業の事業推進について協議しています。

今後の課題・展望

協議会が続いていくためにも、メンバーを増やさないといけません。ボランティアではお願いもしいくい実情があります。今後、収益活動もできるように、将来的には一般社団法人を立ち上げるための研究・準備に取り組んでいます。

交通面においては、住民が移動する際のバスの便数も路線も減ってきています。高齢者や子供をはじめ、地域住民の移動手段を確保するため、横瀬地域づくり協議会で「移動支援・運送サービス」を実施するライドシェア事業について研究をしています。

取材を経て

先進地視察を経て、「その地域だからできる」ではなく「うちの地域もできることがたくさんある」、「うちの地域には何もない」ではなく「うちの地域にあるものは何でも資源になる」と非常に前向きに考えられており、今後どのような取組を行っていかれるか楽しみになりました。

取材を終えて、外でスタッフの方々と談笑していると、学校帰りの小学生がこんには！と元気な声であいさつしてくれました。普段から交流が図られ、郷土愛を育てほしいというスタッフの方々の想いがちゃんと子供たちに届いていると感じました。

まとめ

- ① アンケートで住民の声を収集
- ② アドバイザーの講演で共通意識が生まれた
- ③ 地域にあるものは何でも資源になる
- ④ 子供たちの郷土愛を育む取組
- ⑤ 米軍との交流